川島・藍場川地区にまつわるストーリー

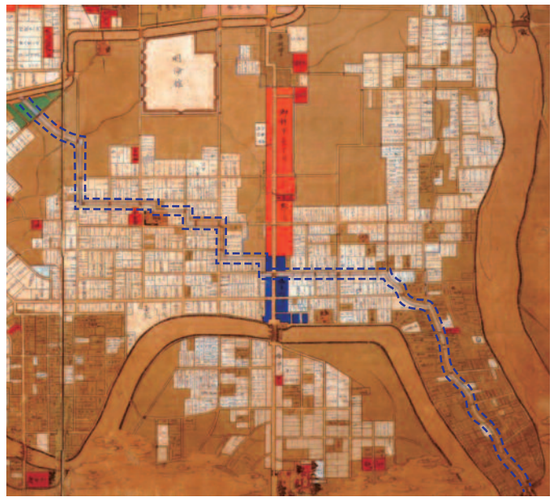
囲い付きのハトバ

藍場川の由来

18世紀中頃、６代萩藩主毛利宗広は参勤交代で江戸と萩を往復する途中、岡山城下に立ち寄りました。そこには倉安川という大きな溝が掘られていて、吉井川からこの溝を通して城下へ水を引き入れ、城下の経済や生活に役立てられていました。宗広はこの倉安川を参考に、阿武川の支流である松本川から萩城下へ水を引き入れる溝の開削を計画しました。

こうして萩城下に造られた大きな溝は「大溝」と呼ばれ、農業用水や防火用水、川舟の通航など、様々な形で城下の生活に利用されてきました。萩城下の人々はこの大溝が汚れたり崩れたりしないよう、大切に守り続けました。

その後、大溝の水を利用して藍玉（藍色の染料）の製造が行われるようになると、いつしか萩の人々は大溝のことを「藍場川」と呼ぶようになりました。


明治初年の城下町絵図　萩博物館蔵

藍場川と生活

川島の人々にとって藍場川は生活に欠かせないものでした。川沿いの家や道路にはハトバと呼ばれる水面まで下りる石段がいくつも設けられ、昔はそこで米をといだり洗い物や水汲みをしたりしていました。今でも畑で取れた野菜を洗う姿が見られます。雨よけに屋根と囲いを付けたハトバや、川の流れを屋内に引き込んで家の中に造られたハトバもあります。

藍場川は憩いの場でもありました。夏には子ども達が泳いだりシジミやエビをとったりして遊ぶ姿や、涼み台と呼ばれる川沿いに設けられた木製の台に座って夕涼みやホタル狩りを楽しむ姿も見られました。川の水を引き入れて、池泉庭園を造っている家もあります。また、昔は城下で消費される薪や炭を積んだ川舟が、藍場川に入ってきていました。そのため舟が下を通れるよう、藍場川の橋は道路より高く造られていました。

昔からのハトバや石橋などは今でも多く残っていて、藍場川沿いの生活様式を現代に伝えています。この風景を後世にも伝えたいという思いから、昭和47年（1972）に藍場川の全ての水面と、最上流から約500mの地点までの川の右岸から10mの範囲を、平成８年（1996）には川島地区の川の両岸から10mの範囲を「歴史的景観保存地区」に指定し、景観そのものを文化財として守り続けています。

ハトバ

屋内のハトバ

高く造られた石橋と涼み台

旧湯川家屋敷の池泉庭園

藍場川の昔と今

藍場川の最上流に「樋の口」と呼ばれる場所があります。昔はこの樋の口にある樋門から、松本川の水を直接藍場川に引き入れていて、阿武川から下ってきた小舟が樋門を通って藍場川に入っていました。現在では樋門は閉鎖されて舟も通らなくなり、代わりに自動車が増えたため車でも渡れるように低くて平らな橋が藍場川に増えていきました。

江戸時代には藍場川の環境を守るため、川での魚釣りが禁止され、人々は川の清掃を怠りませんでした。昭和の中頃までは子どもが川で遊ぶ姿がよく見られましたが、次第に住宅が増え、家庭排水が大量に藍場川に流れたことで水が汚れてしまった時期もありました。現在は水がきれいになり、再び子どもが川で遊ぶ姿が見られるようになりました。

また、昔の藍場川にはシジミやウナギ、ホタルなど様々な生物が生息していましたが、樋門の閉鎖や環境の変化によって川の生物は減ってしまいました。しかし今でも藍場川にはメダカやハヤ、ウナギなどが生息し、またそれらを狙ってやって来るサギやカワセミなどの野鳥の姿も見られます。

70年代の藍場川
萩博物館蔵

川島出身の総理大臣

山県有朋

桂太郎

多くの総理大臣を輩出してきた山口県ですが、その中でも山県有朋と桂太郎の２人は川島の出身です。山県有朋は松下村塾の塾生で、維新後は近代陸軍の基礎づくりに尽力、後には陸軍大将となり、日清・日露戦争を推進しました。明治22年（1889）と明治31年（1898）に２度組閣しました。桂太郎は萩の平安古で生まれ、３歳の時に川島に移り住みました。明治34年（1901）に組閣し、日露戦争前後の難局を担いました。その後、明治41年（1908）、大正元年（1912）と計3度に渡って組閣、通算在職日数2,886日は歴代トップです。第９代～第11代総理大臣には山県有朋、伊藤博文、桂太郎と萩ゆかりの人物が３代続けて就任しました。

現在、山県有朋の誕生地と旧宅地（汲月堂跡）には石碑が残されています。また、桂太郎が晩年に川島に建てた屋敷は平成９年（1997）に萩市に寄贈され、「桂太郎旧宅」として文化財施設として整備され、公開されています。

画像提供：萩博物館

施設のご案内

旧湯川家屋敷

藍場川の最上流に建てられた武家屋敷です。藍場川の水を引き入れて造られた池泉庭園があり、その池の水を屋敷の下に通して台所や風呂場に設けたハトバで利用できるようになっています。藍場川沿いの武家屋敷の典型的な水の利用方法を見ることができます。

住　所：萩市川島67
電　話：0838-25-3139（萩市観光課）
時　間：9:00～17:00　年中無休
料　金：100円
※萩市文化財施設1日券（310円）対象施設
※普通車駐車場、公衆トイレ有り

桂太郎旧宅

幼少期に川島に移り住み、明治維新後には3回にわたって内閣総理大臣を務めた桂太郎の旧宅です。この旧宅は明治40年（1907）に桂が少年期を過ごした土地を買い戻して新築したもので、敷地内には藍場川の水を引き入れて造られた池泉庭園があります。また、美しい音を奏でる水琴窟もあります。

住　所：萩市川島73-2
電　話：0838-25-3139（萩市観光課）
時　間：9:00～17:00　年中無休
料　金：100円
※萩市文化財施設1日券（310円）対象施設

善 福 寺

永享年間（1429～40）に創建された臨済宗の寺院です。元々は指月山麓にありましたが、毛利輝元の萩城築城の後に川島に移されました。萩の地名が記された最古の文書が残されています（萩博物館寄託）。今でも時鐘を鳴らしていて、大晦日には除夜の鐘をつきます。

※境内に公衆トイレ有り
藍場川駐車場より徒歩５分

川島の季節暦

H28.3 現在

編集
発行
萩まちじゅう博物館推進委員会藍場川部会
萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業実行委員会

平成27年度文化庁文化芸術振興費補助金
（文化遺産を活かした地域活性化事業）
文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

萩まちあるきマップ

阿武川の分岐点に位置する川島は、中世以前から開墾され、川（河）島庄と呼ばれていました。1604年毛利氏の萩城築城のとき、指月山麓にあった善福寺が川島に移築され、武士も居住するようになり町並みができ上がります。

江戸時代に阿武川の支流である松本川から取水し開削された藍場川は、農業用水、生活用水など多目的に利用され、今日まで大切に管理が行われ環境が守られてきました。

今なお清らかに流れる藍場川には、石橋やハトバ、池を構えた旧宅が随所に残っており、周囲の木立とあいまって往時の風景や、暮らしを感じとることができます。また、川島では明治政府で活躍した２人の宰相の足跡をたどることができます。

こうした風情と歴史をたたえた川島を体感してみませんか。

このマップは萩まちじゅう博物館の各エリアのおたからを紹介するマップとしてシリーズで発行しています。詳しくは萩データベースでチェック!!　machihaku.city.hagi.lg.jp/db/

HagiMachijyuHakubutukan
萩まちじゅう博物館

川島・藍場川おたからマップ

藍場川沿いの景観

藍場川沿いの家々では川の水を生活に利用していました。その名残が現在でも残っています。

ハトバ　石橋　涼み台　池泉庭園

川島の巨樹・古木

川島では昔から続く屋敷地や境内地に植えられていた大きく立派な樹木を各所で見ることができます。

凡例
- 萩まぁーるバス 西回りコース
- 萩まぁーるバス 東回りコース
- 萩まぁーるバス バス停
- 駐車場
- 喫茶
- トイレ
- 生垣

おすすめトレイル 藍場川下流コース

- 藍場川駐車場
- ◀ 9 山県伊三郎誕生地
- ◀ 10 山県有朋誕生地
- ◀ 11 汲月堂跡
- ◀ 藍場川沿いの景観（小橋筋）
- ◀ 7 竹内八郎歌碑
- ◀ 8 鳥尾小弥太旧宅地
- ◀ 6 善福寺

おすすめトレイル 藍場川上流コース

- 藍場川駐車場
- ◀ 藍場川沿いの景観（溝筋）
- ◀ 5 桂太郎旧宅
- ◀ 4 旧湯川家屋敷
- ◀ 1 樋の口
- ◀ 2 阿武松之助翁頌徳碑
- ◀ 3 桜樹寄贈人名の碑
- ◀ 川島堤の桜